

**出土遺物からみた遺構の年代** 出土遺物から年代決定を行なうに際しては次の二つの点について充分に慎重であるべきであろう。

第1点としては、しばしば指摘されるところであるが、遺構出土遺物でもって年代決定を行なうに際しては、その出土遺物の入りかたに様々な可能性を考えられるので出土遺物の示す年代をそのまま遺構の上・下限年代とすることには問題があるということである。殊に溝のような開放的な遺構の場合、個々の遺物に入った過程が充分に説明し得ないものが殆んどであり、その開削年代を求めるることは難しく、また廃絶年代についても溝としての機能を失った段階を正確に特定することは難しい。

第2点としては、既往の編年研究に関するものである。従来、県下では当該期（鎌倉・室町期）の土器・陶器類の編年研究は、陶器を中心として、窯業地別に行なわれ、それぞれ体系化がはかられてきたが、窯業地相互の細かな型式間の対応関係については、所謂消費地の発掘調査が少なかったためか、充分な検討が行なわれる機会が少なかった。こうした意味で、この阿弥陀寺遺跡の調査は14～15世紀代の資料を提供するものとして注目されたところでたった。しかし一方ではほかに比較する事例が少ないと、本事例でもって短絡的に各窯編年を調整することには問題があることも確かであることである。しかし、かかる点の克服は容易ではない。そこでここではこうした点をふるまえつつも既往の編年鏡<sup>(1)</sup>で示すこととし、敢えてこれら相互を調整して示すことは差し探えて、およそ妥当とするところを大雑把に示すにとどめた。なお灰釉系陶器碗B類（均質手）についてはB類（△窯洞1）を13世紀末に、C<sub>2</sub>類（△大洞東）を15世紀前葉とした<sup>(2)</sup>。

**遺構の変遷** 結論的に言えば、年代決定に関して上述のような問題を有する遺構の個々の年代は不正確であり、かつ年代の示す幅の広さからみて遺構の変遷を細かく正確に提えることは現状では困難である。ただ大雑把にみれば、出土遺物が14世紀代に限られるもの（A）、14～15世紀中葉におよぶもの（B）、15世紀前葉～中葉のもの（C）とに分けられ、このように変遷したものと推察される。なお、この間に大きな断絶は看取されない。

透 橋	土 器		灰釉系陶器		施釉陶器(瀬戸)	年 代
	土鍋	土釜	碗	壺・甌(常滑)		
S E 1001			B <sub>3</sub>			14世紀
S E 1002			C <sub>1</sub>			15世紀初
S E 1003			C <sub>2</sub>		後期前半	15世紀前半
S E 1004			B <sub>4</sub> ・C <sub>2</sub> ・D		後期前・後半	15世紀
S E 1009			B <sub>4</sub>		後半	14～15世紀
S E 1012			B <sub>3</sub>		前期	14世紀
S E 1013			B <sub>3</sub> ・B <sub>4</sub>			13、14世紀
S E 1016			B <sub>2</sub>	IV期前半		14世紀
S E 1018		A <sub>2</sub>	B <sub>2</sub>	IV期前半		14世紀
S X 1001			C <sub>2</sub>		後半後半	15世紀
S K 1001			C <sub>1</sub>		前期～中期後半	13～15世紀初
S K 1002			B <sub>3</sub>			14世紀
S K 1003	A <sub>2</sub>		C <sub>1</sub> ・C <sub>2</sub>	V期前半	中期後半～後期	14～15世紀
S K 1004			A <sub>1</sub> ・B <sub>3</sub>	III期	前期	13～14世紀前半
S Z 1001			A <sub>1</sub> (B <sub>2</sub> ～) B <sub>2</sub> ・G		中期後半～後期	14～15世紀
S D 1001		A <sub>1</sub>	A <sub>1</sub> ・A <sub>2</sub> ・B <sub>2</sub> ・ B <sub>4</sub> ・B <sub>5</sub> ・C <sub>1</sub>		中期後半	14世紀
S D 1003			B <sub>5</sub>		後期前半	14～15世紀
S D 1004			A <sub>1</sub> ・B <sub>1</sub> ・B <sub>2</sub> ・ B <sub>4</sub> ・C <sub>2</sub>	II期・III期後 半	前期～後期	13～15世紀
S D 1005			B <sub>2</sub> ・B <sub>3</sub> ・B <sub>4</sub> ・ B <sub>5</sub>	?	後期前半	14～15世紀
S D 1006			C <sub>1</sub>			15世紀初
S D 1013			A <sub>1</sub> ・B <sub>2</sub> ・C <sub>1</sub>		中期後半	14～15世紀初
S D 1014		A <sub>2</sub>	B <sub>4</sub> ・C <sub>1</sub>		中期～後期	14～15世紀
S D 1015東西 ・南北		A <sub>1</sub>	A <sub>1</sub> ・B <sub>3</sub>		中期前半	14世紀
S D 1016			B <sub>2</sub> ・C <sub>1</sub>	IV期後半	前期前半～中期	13～15世紀
S D 1016			(B <sub>2</sub> )	IV期後半	前期前半・後期	13世紀前半 14～15世紀
S D 1017			B <sub>2</sub> ・B <sub>4</sub>			14世紀
S D 1018			A <sub>1</sub> ・B <sub>3</sub>		前期	13～14世紀
S D 1019			A <sub>1</sub> ・B <sub>2</sub> ・B <sub>3</sub>		中期後半	14世紀
S D 1020			B <sub>4</sub> ・C <sub>1</sub>			14～15世紀初
S D 1021		A <sub>2</sub> ・A <sub>3</sub> ・A <sub>4</sub>	A <sub>1</sub> ・B <sub>2</sub> ・B <sub>3</sub> ・ B <sub>4</sub> ・B <sub>5</sub> ・C <sub>1</sub> ・ C <sub>2</sub>	IV期前半・V 期前半	中期後半	14～15世紀
S D 1022東西 ・南北	A <sub>1</sub>	A <sub>2</sub> ・A <sub>3</sub>	A <sub>1</sub>	B <sub>2</sub>	B <sub>3</sub>	14世紀
S D 1023(平行) 〃(以南)	A <sub>3</sub>	A <sub>1</sub> ・A <sub>2</sub> ・B <sub>1</sub>	B <sub>4</sub> ・B <sub>3</sub>		前期	13、14世紀後半
S D 1024	A <sub>1</sub>		B <sub>2</sub> ・C <sub>1</sub>	IV期前半	中期後半～後期	14～15世紀
S D 1025			A <sub>1</sub> ・B <sub>2</sub>			14世紀
S D 1033			B <sub>4</sub>			
S D 1039		A <sub>1</sub>	A <sub>1</sub> ・B <sub>2</sub>			14世紀(前半)
S D 1051			A <sub>1</sub> ・A <sub>2</sub> ・B <sub>3</sub>			14世紀
S D 1052		A <sub>2</sub>	B <sub>4</sub>			14世紀

## B. 遺物

遺物は溝・井戸・土坑等から出土したが、その大半は溝からの出土である。遺物としては、土器・陶磁器類、木製品、漆製品、金属製品、石製品および動・植物遺体がみられる。量的には土器・陶磁器類、なかんづく陶器が圧倒的に多い。

以下、a. 土器・陶磁器、b. 木製品、c. 漆製品、d. 金属製品、e. 石製品の順で、遺構内出土のものを中心報告する。動・植物遺体については後章でふれる。

### a. 土器・陶磁器類

記述の煩雑をさけるため、土器・陶磁器類の種類の器種について若干の分類と用語の整理をあらかじめ行っておきたい。

#### 種類

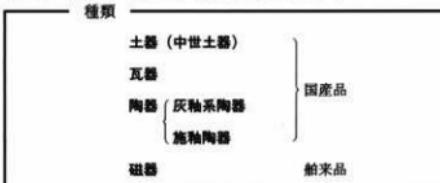
土器・陶磁器類としては、土器、瓦器、陶器、磁器の各種がみられる。

土器は、皿類および鍋・釜類に限られ、量的には少ない。鎌倉・室町時代の土器（土師器）については土師器、中世土師器、土師質土器等の様々な呼称が現在用いられている。いまここではこの問題に深く立ち入ることはさけ、既述の赤生土器との区別を考え、適切な用語とはいえないが、便宜的に「中世土器」の呼称を用いておきたい。

陶器はいずれも所謂瓷器系の陶器で、便宜的にこれを灰釉陶器（白瓷）の系譜上にあって原則として施釉しない灰釉系陶器と釉薬を施す施釉陶器に分ける。量的には灰釉系陶器が圧倒的に多い。産地についてはいずれも猿投窯、瀬戸・美濃窯・常滑窯と考えられるもので、遠隔地にある窯からの搬入品については認めるにいたっていない。

瓦器は量的に少なく、器種も「火鉢」に限られ、椀類の出土をみない。

磁器はいずれも中国製磁器で、青磁・白磁・青白磁がみられる。器種としては水滴・瓶子もみられるが碗・皿類が多い。



#### 器種

中世土器の器種としては、鍋、釜、皿がある。殊に從来、鍋・釜類の器種については様々な名称が与えられてきたが、ここでは鍋の有無により鍋の無い土鍋と鍋を有する土釜に分けることとした。詳細は分類については第228図で示す分類に基づくことにする。

灰釉系陶器の器種の名称については、碗、皿、鉢、壺、甕等を用いることとし、いわゆる「山茶碗」、「山皿」を灰釉系陶器碗・灰釉系陶器皿と呼ぶことにする。さらにこの灰釉系陶器碗・皿については、所謂「均質手」と「荒肌手」のものがある。便宜的にここでは

## 施釉陶器



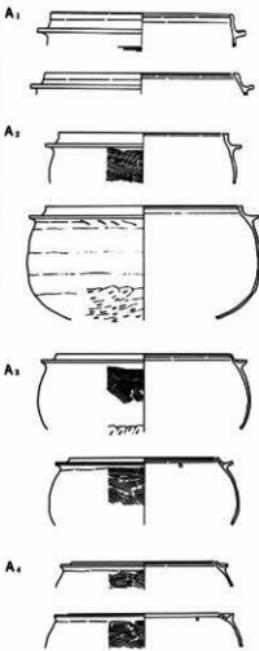
第225図 中世土器の分類(I)

## 施釉陶器の分類

分類にあたっては、基本的に藤沢良祐氏の見解<sup>(9)</sup>に依拠し、形式の表記を例えれば瓶子 I類・II類・III類を瓶子 A・B・C と改めて示すこととした。これは灰釉系陶器鉢 A・B などと表記した上の統一をはかったためである。

藤沢良祐 1984「古瀬戸概説」「美濃陶磁歴史館報III」岐阜県土岐市。

### 土蓋 A



### 土釜 A

土釜 A は小片が多く全形を伺い知るものは少ない。口縁部の造作を中心に土釜 A<sub>1</sub>～A<sub>4</sub>に分ける。

#### 土釜 A<sub>1</sub>

水平方向に突出する鉗に、直立ないし内傾する口縁部のもので、鉗の長さに較べ口縁部の長さが大きい。体部は箱形に近いものが推測される。

#### 土釜 A<sub>2</sub>

水平方向に突出する鉗に、内傾したのち垂直方向に立ち上がる口縁部のもので、体部は幾分丸味を有する。体部上半はハケ目調整で下半はケズリ調整。ハケ目は弱く痕跡的なものもみられる。

#### 土釜 A<sub>3</sub>

鉗は幾分上方へ突出し、口縁部は内傾するものの長さは鉗に勝る。焼成前に口縁部と鉗との境に小孔を対面に穿つものもみられる。体部は扁球形を呈す。

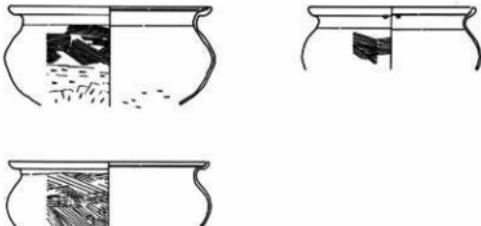
#### 土釜 A<sub>4</sub>

鉗は斜上方へ突出し、口縁部は大きく内傾し、外側からみた場合は口縁部が鉗にかくれるものも散見される。胎土が精緻で器壁は格段と薄くなり、外面のハケ目は粗く、土鍋 A<sub>2</sub>と通じるものがある。ほとんどものに小孔（焼成前）が対面に穿たれている。

#### 土鍋 A

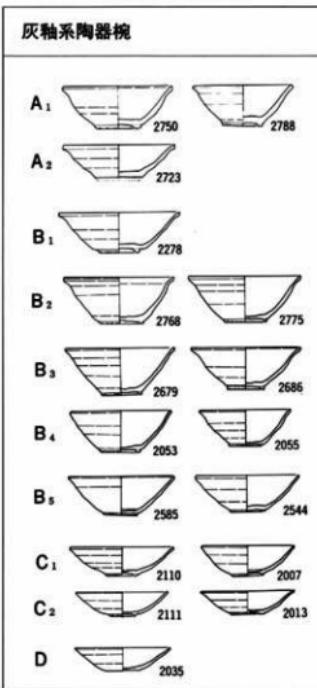
扁球形の胴に、直立する短い頸部を有したのち口

### 土鍋 A



縁部が大きく外反し口縁端部が折り返されるものを土鍋 A とする。これは從来「伊勢型鍋」と呼称されたものである。

第226図 中世土器の分類(2)



第227図 中世土器の分類(3)

しばしば用いられる「北部系」(均質)、「南部系」(丸肌手)という用語でこれを区別することとしたい(第229図)。出土量の多い椀については便宜的に次のように分ける。まず南部系のものを椀A(田土報告 梗D)として、北部系のものを底部が体部に比べ幾分厚手か同厚で底内面の中心に所謂「殺し」が顕著な椀B(同前 梗E)、底部が小さく薄く底内面が基本的に不調整で体部との境に凹みか段を有する椀C(同前 梗F)および底内面の中心から口縁にかけて单一曲線をなし底外面が回転糸切りのままで無高台の椀Dとに分ける。これらはさらに口縁の造作・形態の差異・法量から第229図に示すように細分するが、相対的な要素が多くその層について多く主観的な面がある点をあらかじめことわっておきたい。なおここでいう椀A<sub>1</sub>・A<sub>2</sub>は藤沢良祐氏の編年の第8ないし第9型式、北部系の椀B<sub>1</sub>は田口昭二氏の編年の窯洞1号窯式椀C<sub>1</sub>・C<sub>2</sub>は大洞東1号窯式に概ね対応する。

鉢についてはこれをABの二つに分ける「土田報告」の分類に依拠する<sup>(11)</sup>。

施釉陶器の器種名については、通例に従い「天目茶椀」、「四耳壺」等の名称を便宜的に用

いることとする（第227図）。また瓦器、中国製磁器についても通例に従っておきたい。

以下、遺構毎に報告する。

#### 井戸（S E）（図版107）

S E1001 いずれも井戸枠等の抜き取り跡よりの出土で、破片資料である。

灰釉系陶器 梗（2002～2004）および鉢A（2001）がある。梗はいわゆる南部系（荒肌手2002～2003）と北部系（均質手 2004）がある。前者と後者との型式差は大きく、鉢Aとの比較からみて前者は混入品であろう。2004は梗B<sub>2</sub>。鉢A（2001）は直線的に外傾する体部の口縁端部が外方へ若干突出し上面が凹む。

中世土器 皿（2005・2006）がある。ともに底内面と口縁部外面をヨコナデ、底部外面は不調整のものである。

S E1002 いずれも井戸枠等の抜き取り跡より出土である。

灰釉系陶器 いずれも北部系の碗。2007および2008は梗C<sub>1</sub>で2009は梗B<sub>1</sub>（？）の底部片である。完形品である2007の内面には漆様の付着物がみられる。

S E1003 埋土の上一下層（2012）、下層（2010・2011）からの出土すべて破片である。

灰釉系陶器 鉢A（2010）および梗（2011）がある。鉢A（2010）は、S E1001出土例に較べ幾分屈曲する体部で、口縁端部の外方への突出が大きく、端面には沈線状の凹みがまる。梗（2011）は底部片で、胎土・色調等からみて常滑窯産とみられる。

施釉陶器 灰釉平碗（2012）がある。削り出しの輪高台のもので、接地面（疊付部分）に回転糸切り痕が残り、内面にはトチン跡がみられる。胎土・釉調からみて瀬戸・美濃窯産。

S E1004 便宜的に埋土中位にある沈鉄層を境に埋土を上・下層に分けて遺物の取り上げを行った。上層は2013～2019、下層は、2020～2027である。灰釉系陶器、施釉陶器および中世土器がある。

灰釉系陶器 梗（2013）、皿（2020・2021）、鉢B（2023）、梗（2024）がある。梗（2013）は北部系の梗C<sub>1</sub>で、付高台は痕跡的である。皿（2020・2021）はともに北部系で、回転糸切りの底部から口縁にいたる途中に稜を有するもの（2020）と、短く外反するもの（2021）とがある。2023は鉢Bの底部片で、内面は使用による磨滅が著しい。2024は梗の底部片。2023・2024は胎土・色調からみて常滑窯産。

施釉陶器 灰釉平碗（2015）、天目茶碗（2019）、灰釉盤（2014・2018・2027）、灰釉四耳壺A（2017・2026）、鐵釉小壺（2025）等がある。いずれも瀬戸・美濃窯産。灰釉平碗（2015）は口縁部片。天目茶碗（2019）は削り出しの輪高台で、露胎部に化粧掛は認められない。灰釉盤は、口縁部が「折縁」の灰釉盤Aとストレートの灰釉盤Bとに分けられる。さらに

前者は、口縁端の折返し部が幾分凹むもの（2018）と凹みが深く、口縁部上面の中央が突帯状になるもの（当初から突帯を作り出している可能性あり）とがある。後者の2014は端部が丸く肥厚している。灰釉四耳壺A（2017・2026）はともに底部片。鉄釉小壺（2025）は回転ヘラ削り調整の底部外面を除く全面に施釉されている。以上のはかに器種を特定し得ない2016がある。回転糸切りの底外面を除きほぼ全面に灰釉が施されている。盤類であろうか。

**中世土器 皿（2024）**がある。口縁部の内外面をヨコナデ調整したもので、ヨコナデの範囲は体部の $\frac{1}{2}$ ほどである。

S E1005 ともに井戸枠内埋土からの出土で破片資料。

**灰釉系陶器** ともに碗の口縁部片で、北部系のものである。口縁端部の造作からみて碗B<sub>3</sub>～B<sub>6</sub>。

S E1006 井戸枠等の抜き取り跡（？）からの出土。

**灰釉系陶器** 碗（2030）が1点。北部系の碗B<sub>5</sub>である。

S E1008 井戸枠等の抜き取り跡（下層）からの出土。

**灰釉系陶器** 鉢A（2031）のほか図示し得ないが北部系の碗の細片がある。鉢A（2031）は、底内面から体部内面下半の磨滅が著しい。

S E1009 いずれも埋土の下層からの出土である。

**灰釉系陶器** 北部系の碗（2032～2035）がある。2032は碗B<sub>4</sub>、2034は碗C<sub>2</sub>、2033は碗B<sub>3</sub>～B<sub>4</sub>の口縁部片である。碗D（2035）は底内面と体部との境には碗Cにみられるような段差等の屈曲ではなく中心より单一曲線で口縁部へいたるもので、成形技法を異にしているものと推察される。

**施釉陶器** 灰釉盤B（2036）がある。回転ヘラ削り調整の底外面には貼付足（三足？）の痕跡が認められる。瀬戸・美濃窯産。

S E1012 井戸枠等の抜き取り跡よりの出土で破片資料である。

**灰釉系陶器** 2037・2038ともに北部系の碗。2037は碗B<sub>5</sub>ないしB<sub>6</sub>の口縁部片。2038は碗B<sub>4</sub>の小型品。

S E1013 便宜的に埋土中位の沈鉄層を境に上・下層に分けて遺物の取り上げを行う。2043・2046～2048・2051が上層出土品である。

**灰釉系陶器** 碗（2039～2043）、皿（2044～2049）、陶丸（2051）がある。2045は完形品。碗・皿はいずれも北部系のものである。2039・2040は碗B<sub>5</sub>、2041は碗B<sub>6</sub>、2042・2043は碗

B<sub>1</sub>～B<sub>4</sub>の底部片である。皿はいずれも体部が外反するものであるが、2046、2047、2049のように途中で緩い稜を有するものがある。陶丸（2051）は手づくね。

施釉陶器 灰釉卸皿（2050）がある。上方にむく口縁端面の両端の突出はない。瀬戸・美濃窯産。

S E 1014 木組内（2054）および曲物内（2052・2053・2055～2059）埋土よりの出土である。

灰釉系陶器 梗（2052～2055）、皿（2056～2059）がある。ともに北部系のものである。梗はいずれもB<sub>4</sub>で大（2052～2054）小（2055）ある。皿は外反する体部で口縁が肥厚する2056～2058と、直線的な体部の2059がある。なお梗は4個体とも完形であるに対し皿はいずれも口縁一部が欠損している。皿の欠損部をみると2～3方からの打撃をうけており意図的に打ち欠かれた公算が大である。

S E 1016 井戸枠等の抜き取り跡からの出土で、いずれも破片資料である。なお図示し得ていないが井戸枠として用いられた甕についてもここで報告することにする。

灰釉系陶器 梗（2060・2061）、皿（2062～2064）、鉢A（2065）がある。梗・皿はいずれも北部系。梗（2060）はB<sub>2</sub>で、口縁部を欠く2061はB<sub>2</sub>～B<sub>3</sub>に比定されるものである。皿は概して深手で、体部は緩く外反し、口縁部を肥厚させるものである。鉢A（2065）は底部片で、底部が極端に薄い。図示し得ないが井戸枠として転用されていた甕（図版）は口径48cm、遺存高40cm、胴部径84cmの大形品で、口縁部は断面「→」状のもので幅4cmほどの縁帯をもっている。常滑窯産。

S E 1018 いずれも井戸枠内よりの出土である。

灰釉系陶器 梗（2066）、皿（2067・2068）、甕（2070）がある。梗（2066）は体部が直線的に外傾するB<sub>3</sub>である。皿（2067・2068）は体部が緩く外反する。甕（2069）は口径48cmの大形品で、口縁部は基本的には断面「→」状のもので下半が頸部に密着した状況である。常滑窯産。

#### 土坑（S K）・墓（S Z）（図版109～図版111）

S K 1001 所謂四分割法によって発掘し、北西・南西・北東・南東部に分けて遺物の取り上げを行なった。ただし西部でS K 1002と重複、壊されており、しかもS K 1002の範囲が幾不明瞭な箇所がみられたため北西・南西部上層出土品については、その帰属に問題がなしあとはいえないきらいがある。このため出土地点について表示した。

灰釉系陶器 梗（2091・2094）および陶丸（2102・2103）がある。2094は幾分深めの梗C<sub>1</sub>で、2091は梗C<sub>1</sub>ないしC<sub>2</sub>の底部片でともに北部系。陶丸はともに手づくね成・整形品。

施釉陶器 鉄釉香炉（2092）、灰釉盤A（2093）、灰釉平碗（2096）、天目茶椀（2097）、灰釉盤（2093・2133）、灰釉卸皿（2095）、灰釉四耳壺A（2098）、鉄釉四耳壺B（2099）、

灰釉瓶B(2100)等がある。いずれも瀬戸・美濃窯産。鉄釉香炉(2092)は回転糸切り底に足が付くもの。天目茶碗(2097)は削り出しの輪高台で、露胎部に化粧掛は認められない。2093は折縁の灰釉盤Aで端部が肥厚する。灰釉卸皿(2095)の底外面は回転糸切りである。灰釉四耳壺A(2098)は肩部に縫がめぐり、釉は薄くムラがある。灰釉瓶B(2100)は、所謂締腰瓶子の底部片で、紋様は画花紋である。底外面は回転糸切り。2101は灰釉瓶子の胴部片で、紋様は印花紋である。

中国製磁器 青磁碗(2105)と白磁水滴(2104)がある。青磁碗(2105)は口縁部片で外面に蓮弁紋を刻している。薄青色の釉調からみて竜泉窯産とみられる。白磁水滴(2104)は3片からなるもので、そのうち1片がこのSK1001の出土で、他2片は後述SX1001からの出土である。原位置については詳にし得ないが、SK1001出土片に炭化物の付着をみるとことからすればSX1001から何らかの理由で移動したものとみるべきかも知れない。

北西部 2101(上)	北東部 2094 2096(下) 2105(上)
南西部 2092(上) 2103(上) 2093(上) 2133(上)	南東部 2104(上) 2097(上) 2100(上) 2101(上)
	(上)は上層出土

SK1002 上記SK1001の西部に重複、廻して穿たれた土坑である。したがってSK1001の遺物が混入している公算は大である。

灰釉系陶器 いずれも碗(2088~2090)で北部系のもの。2088は碗B<sub>1</sub>で、2089~2090はB<sub>2</sub>ないしB<sub>3</sub>の底部片。

SK1003 SD1020を廻してつくられた土坑で、埋土は大きく上・下層の2層に分けられる。遺物は南北を2分し、東西方向を3分し、北西部・北中部・北東部・南西部・南中部・南東部の6分割で取り上げたが、格別の傾向が看取されないので一括して示す。いうまでもなくSD1020の遺物が混入している可能性は大である。

灰釉系陶器 碗(2106~2113)、皿(2114~2120)、甕(2131)および陶丸(2121~2123)がある。碗・皿はいずれも北部系のもの。碗はB<sub>2</sub>ないしB<sub>3</sub>の底部片(2106)のはかはC<sub>1</sub>(2107~2110・2112)およびC<sub>2</sub>(2111・2113)である。皿の形態は様々であるが、大きく深手のもの(2114~2116)と浅く扁平なもの(2117~2120)に分けられる。甕(2131)は常滑窯産のもので、口縁帯が幅広で頸部に密着するが下端部は外反する。陶丸(2121~2123)は手づくね形品。

施釉陶器 天目茶碗(2124・2125)、灰釉碗(2126)、灰釉平碗(2127)、灰釉香炉(2128・2134)、灰釉盤(2130・2132)、灰釉花瓶(2135)等がある。いずれも瀬戸・美濃窯産。

天目茶碗(2125)は削り出しの輪高台であるが高台脇がヨコナデ調整で凹んでいる。露胎部には茶褐色の付着物が全体に認められる。鉄化粧を意識したものか。2124の露胎部は

鉄化粧が認められる。灰釉輪とした2126は削り出し輪高台の底部は平輪そのものであるが、口縁部の屈曲は天目茶碗の形態を示すという特異な形態の輪である。2127は灰釉平輪の底部片で付高台。灰釉輪香炉は大(2134)・小(2128)があってともに足(三足?)が貼付つくもの。2134は薔薇形の香炉Bで、全面に灰釉が施される。2132は折縁の灰釉盤Aで、口縁端部が丸く肥厚する、2130は小型の盤の底部片と考えられるもの。灰釉花瓶A(2135)は、上胴部に4条の櫛描直線紋(左回り)が巡る。そのほか瓶頸と底部とみられるもの(2129)がある。

中世土器 土鍋A(2136)と皿(2137~2139)がある。土鍋A(2136)は、薄手で均質・緻密の胎土のもので、折返し口縁は内寄し、胴部のハケ目は間隔が広く、荒く施される。皿は大(2137・2138)小(2139)あって、いずれも内面ナデ調整で口縁内外面をヨコナデ、底外面未調整のもの。

瓦器 火鉢(2140)がある。内寄ぎみに立ち上がる口縁部片で端部は尖る。外面に印花紋(菊花)が3個を1単位として施される。器壁は内外面とも黒色を呈すが、焼成不良のため一部茶褐色を呈す。

中国製磁器 青磁輪(2576)がある。外面に蓮弁紋が刻まれている。薄青色を呈す釉からみて竜泉窯産とみられる。

土錐 素焼の土錐(2533)が1点みられる。長さ3.5cm、径1.5cmで、中心に径0.3cmほどの穴があく。

S K1004 埋土は大きく2層に分れるが、遺物の取り上げに際してはこの分層が必ずしも充分でなかったため一括して示す。

灰釉系陶器 輪(2141~2147)、皿(2148~2149)および鉢A(2151~2152)がある。輪は南部系の(2141~2142)と北部系のもの(2143~2147)とがある。2141~2142は輪A<sub>1</sub>で、2143~2146は輪B<sub>1</sub>である。皿(2148~2149)はともに北部系で、薄く扁平なものである。鉢A(2151~2152)の内面は使用による磨滅が著しい。

中世土器 皿(2150)がある。扁平な底部に短く立ち上がる口縁部のつくもので、内面ナデ調整で口縁内外面ヨコナデ調整、底外面未調整のものである。

S K1005・  
S X1001 多量の炭化物を埋土とするS K1005およびその集積であるS X1001から出土した陶器片には、2080・2081・2079・2072のようにお互いが接合するものがふくまれていた。そこでここでは一括して両遺構出土のものを取り扱うこととした。

灰釉系陶器 輪(2071)および甕(2079)がある。輪(2071)は北部系で輪C<sub>1</sub>である。甕(2079)は常滑窯産で、口縁上端を丸くし、口縁帯は頸部に密着する。

施釉陶器 天目茶碗(2074)、灰釉平輪(2072)、灰釉盤A・B(2075~2076)、灰釉卸皿(2078)、鉄釉鏡皿(2077)、灰釉四耳壺A(2080)、鉄釉四耳壺B(2081)等がある。いずれも瀬戸・美濃窯産。天目茶碗(2074)は削り出しの内反り高台で露胎部には鉄化粧が施されている。灰釉平輪(2072)は削り出し輪高台で、体部は直線的に開く。灰釉盤は折縁

のA(2075)と直線的に開くB(2076)がある。2075の口縁端部の肥厚部は扁平である。2073は小型の灰釉盤の底部片であろう。灰釉卸皿(2078)は口径に較べ底径が幅狭なもの。中国製磁器 白磁水滴(2104)および図示し得ないが青磁蓮弁紋碗がある。2104の白磁水滴についてはさきにSK1001の項でふれたように2片が出土し、本来はこのSX1001に存した公算が高い。

**SK1006 SD1004の掘形に存する小土坑から一括して出土。**

中世土器 皿が大(2084~2086)小(2087)4個みられる。いずれも底内面ナデ調整、口縁部内外面ヨコナデ、体部下半から底外面にかけては不調整のもの。大形品は口縁部のヨコナデが体部の1/2ほどで、小形品は底外面との境におよぶ。2084はヨコナデ部が屈折して外方に開く。

**SK1008 ~SK1018 小土坑からの出土で、各土坑1ないし2個体の出土なので一括して表示する。**

遺 墓	遺物番号	種 類	部 類	備 考
SK1008	2082	施釉陶器	灰釉四耳壺A	口縁厚付 瀬戸・美濃窯産
SK1007	2083	施釉陶器	皿	北窯系
SK1010	2153	"	柄	北窯系
SK1013	2154	"	皿	北窯系
SK1011	2155	"	柄	南窯系
SK1014	2156	"	皿	北窯系
SK1015	2157	"	皿	北窯系
"	2158	"	皿	"
SK1012	2159	"	輪花入子	
SK1016	2160	"	皿	南窯系
"	2161	"	"	南窯系
SK1017	2162	"	皿(小柄)	南窯系
SK1018	2163	"	柄	付高台
"	2164	"	"	柄A
"	2165	"	皿	北窯系

**SZ1001 骨粉・炭化物および木柾材(?)混りの埋土中より破片で出土。藏骨器とおもわれる。**

灰釉系陶器 常滑窯産の壺(2166)で、短く外反する口縁部の下端が斜め下方へのび断面三角形の口縁帯を形成している。肩部に降灰釉がみられる。

施釉陶器 瀬戸・美濃窯産の灰釉四耳壺A(2167)で「耳」は付着痕を認めるにすぎない。肩に後がみられ、幅狭な底部に短く開く高台が付く。胴内面はヨコナデ調整、外面の灰釉は焼成不良のためか発色が悪く白色を呈す。

### 溝（S D）（図版112～図版124）

遺物の取り上げに際して、便宜的に埋土中位に存する沈鉄層を境に上・下層に分けた場合がほとんどである。しかし、沈鉄層は基盤へも続き、さらに沈鉄層以下がグライ化していることからみてこの沈鉄層の形成は埋土と無関係であり、おそらくは地下水の常時滞水位の上面が沈鉄層を形成するものと考えられる。したがって、この沈鉄層で上・下層に分割したことによる分層上の意味はほとんどない。そこで以下の報告においては上・下層に分けずに一括して遺物を示すこととした。ただこの沈鉄層は硬く、発掘に際してはこの面で手スコが止まってしまい、さらに下の青色土での分層は困難をきわめるという状況であったことが便利的な分層に適ってしまった大きな理由であった。

S D1001 灰釉系陶器 梗（2168～2180）、皿（2181～2193）、鉢A（2194）、鉢B（2210）、壺（2211）がある。梗（2168～2171）は南部系のもので2168・2169は12ないし13世紀前葉のもので他に同時期のものをみないことから混入品もしくは伝世品と解される。2170・2171は梗A<sub>1</sub>で、2170は口縁端を面取りしている。梗（2171～2180）は北部系のもので、2172～2174は梗B<sub>1</sub>ないしB<sub>2</sub>の底部片で、2176・2177は梗B<sub>2</sub>、2178～2180は梗C<sub>2</sub>である。皿はいずれも北部系で様々な形態のものがある。2184は口縁部を肥厚させ縁帯を設けている。2182、2185、2186、2188、2189は体部下半に稜を有している。鉢A（2194）および鉢B（2210）はともに底部片で、内面の磨減が著しい。無高台の2210は常滑窯産。壺（2211）は常滑窯産で底外面に砂粒が目立つ。

施釉陶器 いずれも瀬戸・美濃窯産で、天目茶碗（2195）、灰釉皿A（2197・2198）、灰釉香炉（2199）、灰釉柄付片口（2200・2207）、灰釉盤A（2205～2206）、灰釉四耳壺A（2202）、鉄釉内耳鍋（2203）等がある。天目茶碗（2195）は削り出し輪高台で、精致な造りである。灰釉皿A（2197）は薄手で深めのものである。灰釉香炉（2199）は口縁部を外方へ屈折させるもので頸部に菊（？）の印花紋を施す。その形状からみて柄腰の香炉Aの口縁部と考えられる。2200は灰釉柄付片口の口縁部で外方へ屈折したのち立ち上がる端部が肥厚している。2207は片口部片で、口縁端部は内弯して立ち上がり肥厚しない。2201・2205・2206は折縁の灰釉盤Aで、いずれも端部を肥厚させている。2208灰釉盤の底部片で、2204も小型の灰釉盤の底部片。灰釉四耳壺A（2202）で内面は回転ヨコナデ調整、鉄釉内耳鍋（2203）は軟質のもので鉄釉に光沢はない。口縁部は外方へ屈折したのち内弯ぎみに立ち上っている。内耳はこの屈折部に設けられている。2209は器種を特定し得ないものであるいは灰釉柄付片口の口縁部片かと思われる。

中世土器 皿（2213）がある。底内面および口縁内外面をヨコナデ調整、底外面不調整のもので、口縁部が緩く外方へ屈折している。

瓦器 火鉢（2212）がみられる。器表が黒色で胎は灰色を呈する。体部の下端近くに1条の貼付突帯がめぐる。

**S D1002 灰釉系陶器 椭 (2214~2237)、皿 (2238~2254、2261)、鉢 A (2255)・鉢 B (2256)、甕 (2257)、陶丸 (2258~2259) がある。椭 (2226~2229) は南部系のもの。2261は12世紀代に比定されるもので、他に同時代のものは見出せないことから混入品もしくは伝世品であろう。2227は椭Aの口縁部片、2228は付高台の痕跡がみられないもので椭A<sub>1</sub>。2229は椭A<sub>1</sub>の底部片。椭 (2214~2225、2230~2237) は北部系のもので、椭B<sub>1</sub>~B<sub>4</sub>に属するものが大半で、2225のみ椭C<sub>1</sub>である。皿も大半が北部系のもので、南部系のものは少なく図示するところでは2238のみである。2261は回転糸切り底に内窩ぎみに立ち上がり体部がつくもので、器高が高く型式的には上記の皿類に先行するものである。2238は小片で口縁端が垂直方向に面取されている。北部系の皿の形態は様々で、体部が外傾するもの、内窩するもの、稜を有するもの等々がある。鉢 A (2255) は S E1001出土 (2201) に類似するもので、口縁端面が浅く凹み、端部が外方へ若干突出する。鉢 B (2256) は、面取りされた端部の両端がヨコナデ調整のため若干突出するもので、常滑窯産。2257は甕の底部片、下半部にヘラ状工具による記号様のものがみられる。常滑窯産。陶丸 (2258~2259) は手づくね成形品。**

**施釉陶器** 底外面に節目を有する灰釉底卸目皿 (2260) がある。口縁部は外方へ屈折したものと短く内窩するもの。瀬戸・美濃窯産。

**中世土器** 土鍋 A (2264)、土釜 A (2262~2263)、皿 (2265~2272) がある。土鍋 A (2264) の口縁折返し部は扁平で、幾分内窩する。2262は土釜 A<sub>1</sub>、2263は鉢部より上方が内傾し幾分短いが土釜 A<sub>1</sub>の小型品の公算が大である。口縁内側には幅広の凹みを有す。皿は大 (2265~2268) 小 (2269~2272) あるが、いずれも底外面未調整で口縁部内外面をヨコナデするもので、2267・2268・2269・2270は口縁部が外傾する。

**瓦器** 三足の火鉢 (2273) がある。内窩する口縁部の外側に3個を1単位に印花紋（菊花）が施される。

**S D1003 灰釉系陶器** 椭 B<sub>1</sub> (2274)、皿 (2275) がありともに北部系。皿は体部下半に稜を有する。  
**施釉陶器** 灰釉仏供 (2276) の底部片がある。

**S D1004 灰釉系陶器** 椭 (2278~2287)、皿 (2288~2299)、鉢 A (2312・2113)、三筋壺 (2316)、甕 (2315) がある。椭 (2285~2286) は南部系の椭A<sub>1</sub>の底部片でこの2点を除いて北部系。2278・2279・2280は、それぞれ椭B<sub>1</sub>・B<sub>2</sub>・B<sub>3</sub>で、2281~2284は椭C<sub>1</sub>である。皿は2288を除き北部系のもので、細部の形状では様々であるが薄手で扁平なもの (2294~2299) が顕著である。鉢 A (2312・2313) はともに口縁端面に沈線状の凹みを有し、端部外方へ若干はり出する。三筋壺 (2316) は2ないし3条を単位とする直線紋を推定3段めぐらすもので、肩部に降灰釉が認められる。12世紀代に比定されるもので、ほかに同時期のものが認められないことからすれば伝世品もしくは混入品であろう。なおこの2316の1片は S D 1006から出土している点は注目される。2315は甕の口縁部片。2316・2315ともに常滑窯産。

**施釉陶器** 天目茶碗(2301)、灰釉平碗(2300、2303)、灰釉皿A(2304)、灰釉皿B(2302)、灰釉盤(2311)、灰釉卸皿(2306・2307)、灰釉瓶子(2308)、灰釉水注(2309)、灰釉柄付片口(2314)等がある。天目茶碗(2301)は削り出しの輪高台。灰釉平碗はともに削り出しの輪高台で、2300は口縁部が極端に薄い。灰釉瓶子(2308)の内面はヨコナデ調整。灰釉水注(2309)には印花紋が施される。灰釉柄付片口(2314)は口縁部が外方へ屈折し内寄して立ち上がるもので、体部下端の形状からみて器高は遺存高に近いものと考えられる。2305は皿ないし盤の底部片。2310は瓶頸の底部片。

**中世土器** いずれも皿(2317~2322)で、底内面ナデで口縁内外面ヨコナデ調整、底外面未調整のもの。

**中国製磁器** 2323は青磁碗の底部片。釉は暗緑色を呈する。

**S D1005 施釉系陶器** 碗(2327~2340)、皿(2341~2353)、陶丸(2357~2358)、鉢A(2360~2362)、甕(2363)がある。碗は南部系の碗A<sub>1</sub>(2337)を除き北部系で、概ね2327~2330・2328は碗B<sub>1</sub>、2333・2331・2332はB<sub>2</sub>、2329・2334はB<sub>3</sub>、2335はB<sub>4</sub>、2336は碗C<sub>1</sub>に分類される。底部片(2338~2340)は碗B<sub>2</sub>~B<sub>3</sub>のものである。皿は2353が南部系のほかは北部系で様々の形態がある。鉢A(2360~2361)は片口で、2360は丸く肥厚する端面に沈線状の凹みを有するが、2361は丸く肥厚するにとどまる。陶丸(2357~2358)は手づくね成形品。甕(2363)は常滑産で、口縁部は下方へ折曲げられ、幅広の縁帯を作り出している。

**施釉陶器** 灰釉皿A(2354)、灰釉皿C(2356)、灰釉盤A(2359)等がある。灰釉皿A(2354)は口縁部が外方へ屈折したのち端部が短く立ち上がるもので、焼成不良のためか釉の発色が悪い。折縁の灰釉盤Aの口縁端部は上方に肥厚する。2355は瓶頸の底部片。

**中世土器** いずれも皿で形態はバラエティに富む。2364は碗形で口縁端部が外反する。2365~2366は口縁のヨコナデ部が外反し屈折部に段を有する。2368は小型品で平らな底部に短く外傾する体部がつく。

**瓦器** 火鉢の足と思われるものが1点(2370)ある。

**S D1006 施釉系陶器** 北部系の碗C<sub>1</sub>(2371)がある。施釉陶器 灰釉卸皿(2373~2374)および器種を特定し得ない2372がある。中世土器 内面ナデ、口縁部内外面ヨコナデ調整で底外面未調整の皿(2375)がある。

**S D1008 施釉系陶器** 北部系の皿(2277)がある。底外面回転糸切りで体部が外反する。

**S D1009 施釉系陶器** 碗(2324)、鉢A(2326)がある。碗は北部系でB<sub>4</sub>ないしB<sub>5</sub>の底部片。鉢B(2326)は底部片で、ほとんどの場合下脚部がヘラ削り調整されるが、本例はそれをみない。

**施釉陶器** 灰釉盤(2325)の底部片。

**S D1013 灰釉系陶器 椭 (2376~2382)、皿 (2383~2386)、鉢 A (2390)、陶丸 (2387~2389) がある。2376~2380は南部系の椭A<sub>1</sub>で高台は欠損している。2377~2381は北部系の椭で、2377~2378はB<sub>1</sub>、2379~2382はC<sub>1</sub>、2381はB<sub>1</sub>~B<sub>4</sub>の底部片。皿はいずれも北部系で外傾する体部のつくもの。鉢 A (2390) は底部片で、体部下半にはヘラ削り調整は認められない。陶丸はいずれも手づくね成・整形品。**

**施釉陶器 折縁の灰釉盤 A (2391) および仏供 (2392) がある。2392は焼成不良で赤褐色を呈す。いずれも瀬戸・美濃窯産。**

**中世土器 いずれも皿 (2393~2396) で、底内面ナデ、口縁内外面ヨコナデ調整で底外面は不調整。**

**S D1014 灰釉系陶器 椭 (2397~2400)、皿 (2401~2404)、甕 (2414) がある。椭・皿はいずれも北部系。2399は椭B<sub>4</sub>の小型品、2400は椭C<sub>1</sub>である。皿は大小あるが、いずれも体部が外傾するもので、2401には緩い後がある。2414は常滑窯産の甕の底部片。**

**施釉陶器 灰釉鉢皿 (2405)、灰釉瓶子 (2407)、灰釉小形壺 (2406) がある。いずれも瀬戸・美濃窯産。灰釉鉢皿 (2405) は、口径に比べ底径が著しく小さかからで、浅く凹む口縁端面の両端は若干突出する。2407は灰釉瓶子の胴部片で、外面に印花紋が施される。2406は小型壺の底部片で、底外面は回転ヘラ削り調整。**

**中世土器 皿 (2408~2413) および土釜 A<sub>2</sub> (2415) がある。皿は2409が椭形のほか比較的頗がはり口縁が緩く外反するものである。内面ナデ調整、口縁部内外面ヨコナデ調整で底外面は不調整である。2411は外反する口縁部と体部との境に明瞭な段を有する。2415は土鍋 A<sub>2</sub>の典型例である。**

**S D1017 灰釉系陶器 北部系の椭 (2416~2419) および常滑窯産の甕の底部片 (2420) がある。2416~2418は椭B<sub>4</sub>・B<sub>5</sub>で底部片もこれらに属するものである。**

**S D1018 灰釉系陶器 椭 (2421~2426) および陶丸 (2427) がある。2421は南部系の椭A<sub>1</sub>で口縁部が幾分肥厚する。2422~2426は北部系の椭で、2422は椭B<sub>5</sub>。2423~2426の底部片はB<sub>5</sub>ないしB<sub>6</sub>のものである。陶丸 (2427) は手づくね成形品。**

**施釉陶器 灰釉瓶子 (2428) で肩部に4~5条の櫛描直線紋が巡る。内面はヨコナデ調整。**

**瓦器 火鉢 (2429) で、直線的に外傾する口縁端は面取りされ内側の端部がわずかに突出している。また底部と体部の稜部は幅狭の面取りがなされている。口径については遺存部が少ないため誤差が大きいものと思われる。**

**S D1015 (東西部)** S D1015は平面「L」字型(北西をコーナーとする)に屈折する溝であり、東西部はS D1013の延長上にあたるため、場合によってはS D1013と重複している可能性がある。そこでS

D1015を東西部、南北部に分けて出土遺物を報告することにする。

灰釉系陶器 梗（2430～2450）、皿（2451～2456）、鉢A（2461）・鉢B（2469）・壺（2468、2474）・甕（2470～2473）および陶丸（2457～2459）がある。梗は南部系の梗A<sub>1</sub>（2430）を除き北部系。2431～2435・2437・2440は梗B<sub>1</sub>で、2433はあるいは梗B<sub>2</sub>とすべきかも知れない。2436・2438・2439は梗B<sub>2</sub>、2442～2444・2445は梗B<sub>3</sub>の小型品である。底部片は梗B<sub>2</sub>～B<sub>4</sub>に属する。皿は2451が南部系で、2452～2456は北部系のもの。後者には体部が外反するもの（2451～2454）と内窓ないし外傾して短く立ち上がるもの（2455・2456）とがある。鉢A（2461）は底部片で、底部と体部は内面では一続きで明瞭な傾斜変換点を有しない。2469は常滑窯産の鉢Bの底部片。2461・2469とも内面は使用による磨滅が著しい。2468は常滑窯産（？）と思われる壺の口頭部。従来常滑窯ではあまり例をみないものであるが、SK1005出土の2079と胎土・色調等が酷似する。2474は厚手の壺の底部片で付高台の剥離痕がある。灰白色の器表に微細な黒色の「ふきだし」が混じる様子は猿投窯なんかんづく東山窯産の可能性を示唆する。甕（2470～2473）はいずれも常滑窯産で、口縁部の断面が「→」状のものから「N」状のものがある。

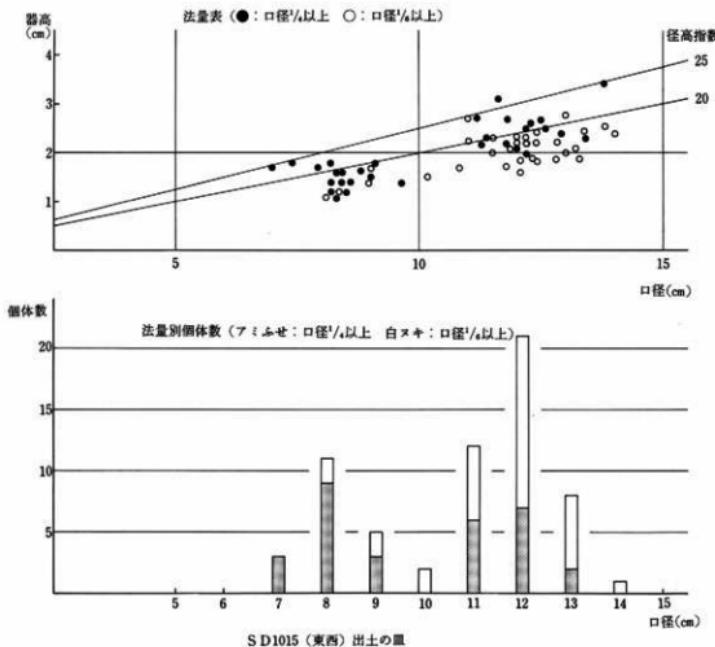
施釉陶器 天目茶碗（2463・2464）、鉄釉梗（2465）、灰釉皿C（2466）、灰釉盤（2462）、灰釉四耳壺A（2467）がある。鉄釉梗（2465）を除き瀬戸・美濃窯産。天目茶碗（2463）は貼付高台で、口径に比べ高台径が大きい。2464は2463の口縁部の形態に類似する。鉄釉梗（2465）は類例をみないので半球形の体部に幅狭の削り出しの蛇目高台がつき茶褐色の鉄釉が高台部を除く全面に掛けられる。高台周辺の露胎部は鉄化粧が施され、高台のいわゆる疊付には回転糸切り痕がみられる。胎は暗青灰色を呈す。産地不明。2466は平底の底部に外傾する体部がつく灰釉皿C。2467は灰釉四耳壺Aの肩部片。

中世土器 皿（2476～2532）、土釜A（2538・2539）がある。他の遺構に比べ皿の出土量が著しく多い。実測し得た62点の皿について若干の整理・検討を加える。成・整形手法についてみると、いわゆるロクロ成・整形あるいは型使用の痕跡は看取されない。これらを法量的にみたものが次頁の表である。残存率が口径4cm以上のものを対象としてみると、口径14～11cmの大型品と口径10～7.0cmの小型品とに大別される<sup>(12)</sup>。小破片からの復元が多いためか形態上の小異が著しいが、大型品（2476～2519）の多くは平らで腰の張った底部を有するもので、梗形に近いもの（2482、2503～2505）は少ない。小型品（2520～2532）についてみると形態的には3種にまとめられる。すなわち、

- a. 体部が内窓ぎみに立ち上がるもの（2521～2524・2532）
- b. 直線的に立ち上がるもの（2525～2531）
- c. ヨコナデ部が外反するもの（2520・2534～2537・2475）

とである。なお、2532の底部は内側に突出するかの如くであるが、いわゆる「ヘソ皿」ほどではない。

土釜Aは、鉢に比べ口縁部が長く直立（2538）・内傾（2539）するもので、口縁端面は平



坦で端部が内側に短く突出し、口縁端内面直下に凹みがめぐる土鍋A<sub>1</sub>。

中国製磁器 青磁皿(2540)、白磁碗(?) (2542)、青白磁瓶子(2541)がある。青磁皿(2540)は完形品で削り出し高台。灰緑色の釉は底内面の中心へおよんでいない。2542は白磁碗(?)というより盤・鉢類の底部片とすべきかも知れない。2541は青白磁の「唐兀唐草文」瓶子の小片である。

S D1015  
(南北部)  
灰釉系陶器 瓢(2543~2546)、皿(2547~2548)、壺(2568)、甕(2567)、陶丸(2569~2570)がある。2543~2544は椀B<sub>1</sub>、2545~2546は椀C<sub>1</sub>でいずれも北部系。皿もともに北部系で、体部が外反するもの(2547)と短く内弯するもの(2548)とがある。壺(2568)は、外反する細い口部に丸く肩の張った体部がつくもので、口縁端部は断面三角形を呈す。甕(2567)は肩部片で後述S D1016の(2572)と同形態のもの推察される。壺・甕とともに常滑窯産。陶丸(2569~2570)は手づくね成形品。